統一思想から見たヴァン・ゴッホ(V. V. Gogh)　の人生と絵

“芸術とは美の創作と鑑賞による喜びの創造活動である”統一思想

“芸術とは真理を作品の中に据えるものである。われわれがすでに馴染んでいるものから自ら抜け出し'作品によって開けた所'へ自身を押し込む限り、また我われの本質自体が存在者の真理の中に立つようになる限り、作品は一つの作品として現実的に存在する。”(ハイデッガー)

目次

１、　はじめに：文化的行為から苦労の経験(苦難)の力
２、　統一思想の芸術哲学理解
　１）　芸術とは何か
　２）　創作の要件－主体の要件
　　① モチーフ、主題、構想
　　② 対象意識
　　③ 個性
３、　ヴァン・ゴッホの人生と絵の世界
　１）＜ジャガイモを食べる人々＞：貧しさと苦難の人生を共にする
　２）＜聖書のある静物＞：人生、聖俗の緊張
　３）＜パイプを置いたゴッホの椅子＞：空と分かち合いの霊性
　４）＜星月夜＞：神へ向けた悲しき霊魂
４、おわりに：ゴッホの＜自画像＞から読み取る苦難の人生と霊性
　参考文献

１、はじめに：文化的行為から苦労の経験(苦難)の力

　人間は自身が置かれている生と、その時代の雰囲気を気分で感知して生きるだけでなく概念的に把握しようとするものである。このような人間の人生と時代における反応は自身が生きながらえている世界で馴染むと共に、その世界で存在すること(In-der-Welt-sein)の意味を見つけ出そうとする努力である。人間はこのような努力によって、自分が属した生の世界の暖かさを満喫しながら生きていけるのである。このように人間は自身が望む生の環境は選択する事はできないが、生まれたその世界の中で絶えまない学習と様々な努力を通してその世界を故郷の世界として作り上げる。つまり自分が属している生の世界で出会う道具や事物、又他人との出会いなど存在の事件を通して、息吹のかかった慣れ親しんだ世界へと作り上げる。このように作られた世界、自分なりに意味づけした世界がいわゆる文化世界といえる。

　ところで、このような文化世界は様々な分野に分別することができる。宗教世界、学問世界、音楽世界、美術世界などである。人間は素質と個性によって多様な文化的行為をし、実存世界を作り出す。このような実存世界の中で我われは自身の生の意味を見つけ出し、他人と分かち合うなかで豊かな人生を享有できるのである。このように重要な文化的行為において、我われが注目すべき事態がある。それは正にその文化的行為者の**生の経験**、あるいは**苦難の経験**を無視することができないという点である。肉体的苦痛と精神的苦難、そして多様な人生の苦労に耐えぬいた人間の文化的行為はその者独特の世界を作り上げる。人の人生の経験はその文化的行為者のモチーフと主題構想力、又対象意識や個性までも決定するほど重

要な力で作用したりもする。

このような観点から筆者は生の経験、特に生に対する態度(苦難の経験)と芸術行為を共属の次元から見た統一思想の芸術論をもとに‘ヴァン・ゴッホ(V.V. Gogh)’の苦難の人生と絵の世界に投影された霊性について熟考してみたいと思う。特に統一思想の芸術の理解‘心情的人生の心理の作品への建立’[1]という視点から解釈してそのような芸術理解がどのようにゴッホの絵の世界を通して現れているのかを見てみたいと思う。筆者が統一思想の芸術理解を論じるにつき、特にゴッホを選択した理由はゴッホの苦難の人生と芸術世界、また彼の宗教性が統一思想の芸術思想で言うところの創作の要件のうち、主体の要件ーモチーフ、構想、対象意識、個性ーを説明するに当たって一番適した例に成りえるという考えからである。

このような問題意識を土台として筆者は**はじめに**、統一意思想の芸術哲学について探ってみることにする。今日のような多様な文化時代、(文化)コンテンツ革命時代に芸術創作と鑑賞の哲学的理解を提示する統一思想の観点についてもう一度熟考してみる。**次に**そのような統一思想の芸術哲学、特に創作の主体者の要件の内、モチーフ、主題、対象意識、個性に焦点を合わせてゴッホの作品にそのような内容がどう表れているのかを記してみる。**最後に**ゴッホの苦難の人生とその人生から紡ぎ出された絵の世界から滲み出る彼の宗教性と霊性の意味について考えてみたいと思う。このような熟考の作業はデジタル技術の絢爛さと各種の電子音の騒々しさに慣れている我われの目と耳を始原的な自然の風景と内面の深さへと向かわせることであろう。

２．統一思想の芸術哲学の理解

１)芸術とは何であろうか

“一般的に広い意味で文化は政治、経済、教育、宗教、思想、哲学、科学、芸術等の全ての人間の活動の総和を意味するものであり、その内でも一番中心的な役割をするのが芸術である。すなわち、芸術は文化の精髄である”[2]“芸術とは美を創造したり鑑賞する人間の活動”[3]を意味するが、統一思想においては人間の創作活動や美を追求する活動を神と人間の相似の原理に立脚して説明している。言い換えると、統一思想においては神が‘愛を通して喜びを得ようとする衝動’である心情が動機になり、人間と万物を創造したと見るのである。よって、神はこのような観点からして偉大な芸術家であり、人間と万物は神の作品である。神は自身の性相と形象に似た対象として人間と万物を創造されたのだが、ここには喜びと相似の創造性が内在している。“神がご自身の二性性相に似るように形象的実体対象として人間を創造され、象徴的実体対象として万物を想像された。これを芸術論に適用すれば創作する芸術家は喜びを得るため自己の性相と形象に似るように作品を作り、鑑賞する者は作品を通して自己の性相と形象を相対的に感じ喜ぶという論理が立つのである。”[4]

存在する全てのものを主体と対象の関係で説明する統一思想においては、美に対しても全

---

[1]このような視点は芸術の本質を“存在者の真理が自ら作品の中に定立させるもの(Sih-ins-Werk-Setzen-der Wahrheit des Seienden)”として見るハイデガー芸術理解からアイディアを得たものである。ハイデガーは真理の作品への性向を言いながらこのような真理の芸術作品への性向へ対応する人間側での見合った関係を結ぶことがすなわち、芸術家の創作行為であるとする。よって、芸術家の運命は真理の作品への性向を非隠蔽性の闘争事件をしっかり経験し、表現するところにあると言える。M.Heidegger,”Der Ursprung des Kunstwerkes”,Holzweg e(GA5),Vittorio Klostermann Frankfurt am Main,1977,M ハイデガー。「芸術作品の根源」、「森の道」、申相喜　訳、nanam　2008 参照

[2] 統一思想研究院「統一思想要項」成和社、1993,417,(以下「統一思想要項」で表記)

[3] 「統一思想要項」,421,5

[4] 「統一思想要項」,420

く同じように適用させる。すなわち、主体(人間)が対象に与える情的な力を愛とし、対象が主体に返す情的な刺激を美とする。ところで対象が鉱物や植物の場合、対象から人間に与えられるのは物質的な力になる。このような物質的な力も情的な刺激と受け入れる事ができる。よって美とは対象が主体に与える情的な力であると共に、情的な刺激と定義することができる。ところで、“美は真や善と共に価値の一つであり、美は情的刺激として感じられる対象価値である。”[5]

このように人間が自身の生活の場において接する事物や風景、又、人から与えられる情的刺激を作品として作り上げる芸術活動[6]には、大別して創作と鑑賞という二つの側面がある。ところで統一思想では、創作と鑑賞という実践活動を人間の欲望と関連させて説明する。すなわち、統一思想において創作は人間の価値実現欲によるものであり、鑑賞は価値追求欲を土台として行われると強調している。人間は誰でも真実に生きようとし、善なる行為をし、美を創造しながら人類に奉仕して生きようとするものである。統一思想では創作行為もこのような全体目的を達成しようとする欲望、すなわち価値実現欲に基づいた行為と見る。しかしもう一方では人間は自分自身のために生きようとする側面も持っている。よって我われは日常生活のなかで接する様々な事物や対象に価値を発見し喜びを得ようとする。これが正に価値追求欲である。[7]

神の創造目的から由来する全体目的と固体目的は不可分の関係であるので、人間の価値実現欲による創作と価値追求欲による鑑賞という芸術行為は共属の次元で見るべきである。“創作は作家が対象の立場で主体である神と人類全体のために価値(美)をあらわす行為であり、鑑賞は鑑賞する者が主体の立場で対象である作品からの価値(美)を教授する行為である。”[8]

２)創作の要件－主体の要件

上記のとおり、統一思想の芸術論は大きく創作と鑑賞の二つの側面から説明されている。この内、筆者は創作の要件において特に作家、主体の要件について熟考してみたいと思う。作家主体のモチーフと主題構成力、対象意識と個性に対する統一思想的立場を一別し、そのような観点からゴッホの作家主体(画家)としての姿を考察してみたいと思う。

1　モチーフ、主題、構想

芸術作品は誰が創作するのか。もちろんそれは作家である。芸術創作者が芸術作品を創作するのである。ところでこのような創作者の芸術作品の創作には創作の動機、すなわちモチーフがあり、この動機によって作品の主題と構想も違ってくる。統一思想ではこのような創作者の創造行為もやはり、神の創造過程に似て成り立つとし、神の創造の過程からまず説明する。

---

[5] 「統一思想要項」, 422

[6] このような統一思想の芸術理解は‘事物と作品’‘作品と真理’そして‘真理と芸術’というテーマで芸術の本質を明らかにするハイデガーの芸術論と比べ多くの示唆点を与えられると思われる。我々の生活世界的な経験から来る様々な物や風景又他人から受ける情的刺激を作品として作ろうとする時、一人の芸術家に接近する事物と作品の意味、そして作品の中に込められている芸術家の個性心理対としての(真理)意識などの問題と共に多くの芸術美学的な談論を展開することができる。このような本格的な芸術哲学的論議に対する詳しい事項は下記を参照することができる。李殊政「ハイデガーの芸術論」、韓国ハイデガー学会編、哲学と現実社、2002；李基相「存在真理の発生事件から見た技術と芸術」、「ハイデガーの存在事件学」seokwang sa、2003, 195－250

[7] 「統一思想要項」425、参照

[8] 「統一思想要項」426

神の創造において、神の性相内部から心情を動機とした創造目的が立てられ、この創造目的を中心に、内的性相(知情意)と内的形象(観念、概念、数理、法則など)が授受作用し構想(ロゴス)が形成される。このような構想の形成過程は芸術家の創作過程にもそのまま適用される。すなわち、芸術家はモチーフ(目的)を中心に主題を立て、その主題を実現する方向で内的性相と内的形象を調和させる。このようにして生成されたものがすなわち構想である。このような過程は神の創造において、内的発展的な四位基台の形成に至る。[9]これを図で表すと次のようになる。

２　対象意識

統一思想の芸術論において特異な点としてまず芸術家の心得、すなわち対象意識に対する説明部分である。“創作とは芸術家が神や全体の前に対象の立場で美の価値を表すことにより主体であられる神や全体(人類、国家、民族)を喜ばす活動であるので、作家はまず対象意識が確立しなければならない。それは最高の主体である神を喜ばし、神の栄光を表す姿勢が対象意識の極致であるからである。”[10]

このような対象意識について統一思想では5点に要約して提示している。第一に芸術家は人類歴史を通じて悲しんでこられた神の心情を慰める姿勢を持たねばならない。第二に芸術家は神と共に復帰の道を歩まれたイエスを始めとして数多くの聖人、義人を慰める姿勢を持つべきである。第三に芸術家は過去と現在の善なる人々の行為を作品に表そうとする姿勢を持つべきである。第四に芸術家は理想世界の到来を人々に知らせる役割がある。第五に芸術家は自然の美と神秘を表現し、創造主であられる神を賛美する姿勢を持つべきである。芸術家がこのような対象意識を持って創作に全力を尽くす時、神からの恩恵と霊界からの協助を受けることができ、この時初めて真の芸術作品が完成する。そして、このような真の芸術作品は芸術家と神の共同作品になるだろう。[11]

３　個性

芸術家だけでなく全ての人間は神の個別相に似た個性真理体である。よって全ての創作品にはその作家の個性が現れるのは当然である。人間の個性の大体は容貌上の個性、行為上の個性、創作上の個性に現れる。創作主体として芸術家と芸術作品は共属の関係を維持していると見れるだろう。

３)ヴァン・ゴッホの人生と絵の世界

いままで我々は統一思想の芸術哲学のうち作家主体の要件について探ってみた。創作者の創作の動機(モチーフ)と主題構想、そして対象意識などに関連した様々な芸術哲学的な説明を一別してみたことになる。このような観点から筆者はヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(V.V.Gogh)の芸術創作者としての人生と主題構想、又対象意識と個性などについて熟考してみたいと思う。ゴッホの作品のモチーフと主題、又画家としての生き方への姿勢等を統一思想の芸術理解に立脚して観察することにより、彼の絵の解釈を新たな視点で提示する事ができるであろう。

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(V.V.Gogh)は３７歳の若さで自ら生を閉じたが、短いと言えば短い１０年の間情熱的な作品活動をし、現代美術の基礎を作るのに重要な役割を果たした。彼は１８５３年、オランダのブラバンド地方の牧師の家庭で長男として生まれた。彼の家柄は１７世紀以後、聖職と芸術家の家系として有名でゴッホの人生で弟のテオ(Theo)と

---

[9]「統一思想要項」 427－485.参照

[10]「統一思想要項」 429－430.

[11]「統一思想要項」 430－431.参照

の関係は絶対的である。テオはまるで兄のために生まれ、兄のために生きた人物かのようであった。ゴッホの名作が世間の目に触れるようになったのもある意味、テオの献身的な努力があったためである。ゴッホは誠実で勤勉な父親から教育を受け、１２歳でゼーフェンベルヘン(Zevenbergen)技術学校で過ごし、さほど勉強には関心を示さない反面読書と自然の変化を繊細に観察し孤独な生活を送った。ゴッホはティルブルフ(Tilburg)の近くの高校に入学したが、突然学業を中断し１６歳の時叔父が経営するハーグ・グーピル(Goupil)という画廊で働くようになる。彼は様々な分野の書物を読み美術館の名画を鑑賞しながら美術に対する芸術的な眼目を高めていった。

１８７３年、彼はグーピル画廊のロンドン支店に移り、イギリスの風景画家の作品を見ながら美術に更に魅了されるようになる。ここで、下宿屋の娘ウージェニー・ロイアー(U.Loyer)との失恋で深い傷を受け、１８７５年パリ支店に転勤したが適応できずに父親の元に戻る。彼は本当に自分がするべきことは何なのか悩んだ挙げ句、父と同じ道を歩むことにしたが神学の勉強が負担で伝道師になった。

そして彼は貧しい鉱夫の多かったボリナージュ(Borinage)炭鉱地帯に行き、全身全霊を欠けて情熱的に伝道を行った。悲惨な待遇を受けている鉱夫達のために抗議をするなど過剰な自己犠牲と激情的な性格により、教会当局から宣教活動を拒否されるほどであった。ゴッホは人間関係の失敗と挫折を経験し、その度に弟の精神的な激励と経済的な後援を受けついに１８８０年芸術家の道に進む。[12]

１）＜ジャガイモを食べる人々＞：貧しさと苦難の人生を共にする

＜ヌエーネン.1885.4　油彩　画布81,5×114,5
アムステルダム。ビンセント・ヴァン・ゴッホ国立美術館＞

ところでこのような芸術家(画家)としてのアイデンティティを形成するまでゴッホは様々な苦悩と彷徨いを繰り返した。深い寂しさと愛の欠乏、周囲から感じる疎外感の中で彼は人間の根源的な苦悩を描きたい衝動に駈られた。ゴッホが27歳になった時、自分の心臓の真ん中から響いてくる精霊の声を聞いたと言う。正に画家の道を通じて神と出会い、又その意味を知るようになるだろうという声を聞いたのである。この時からゴッホに絵を描くことは自分にとって聖職と同じ意味を持つものと考えるようになったようである。実際父親の牧会を助け伝道師の仕事をしたことのあった彼は、ボリナージュ時代に田舎の人々の単純で素朴な生き方を込めた絵を多く描いた。よって彼の絵において重要なモチーフと主題のうちの一つ

[12] 鄭金嬉「ストーリー近代美術史」集思齋　2001　198－199 参照

が正に、自然とその中での純朴な農村の人々になったのである。ゴッホはなぜこのような風景から神のみ旨と精霊の充満さを見て取ったのであろうか。筆者はこのような絵からゴッホの画家としての主題の要件、すなわち主題意識と対象意識、個性等を色濃く確認できると思う。この＜ジャガイモを食べる人々＞を見ながら更に考えてみたいと思う。

きつい日課を終えて、微かな灯りの下家族がテーブルを囲んで夕飯を食べている。微かな灯りはまるで神の愛がたくさん込められた精霊の祝福であるかのように暗い部屋を照らしている。代々受け継げられてきた命の糧であるその土地に自らの手で植え、自らの手で収穫したジャガイモを食べている。それは彼らの努力で得た自然そのままの完全なものである。よってそれは神が与えられた祝福の糧でもある。それを食べているその顔一つ一つに神と祝福をを受けた人間の顔を描いてみる。その顔からは自然の摂理、人間の純粋さと純朴さ、神の精霊の恩賜が渾然一体となっている。[13]

ゴッホはボリナージュ時代に牧会をしている父と共にいながら伝道師として働いていたのだが、そこで炭鉱地帯の貧しい鉱夫や農夫と共にし、土匂さを筆に込めたような絵を数多く描いた。この＜ジャガイモを食べる人々＞が代表的な絵である。この絵から分かるように貧しく厳しい暮らしを日々送っているが、その単純で素朴な人生、純粋で正直な人生の中にいつも共にあられる神の恩寵を彼は感知したのである。この世の金と権力の論理に明るく素早く生きる道を模索する人々の目には全く魅力のないこの絵を描いた後、なぜゴッホはそれほどまでに満足したのだろうか。ここで我々は先ほど述べた統一思想の芸術論で言うところの主体の要件、更に具体的に芸術家の対象意識と個性についての内容をもう一度思い浮かべるようになる。ゴッホの画家としての個性と作品のモチーフ、主題、構想などについてもである。

２）＜聖書のある静物＞；人生、聖俗の緊張

＜ヌエーネン．1885,4　油彩　画布65×78
アムステルダム　ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ国立美術館＞

もう一つの絵を見てゴッホの画家主体としての多様な面について考えてみたいと思う。＜聖書のある静物＞という絵を見てみよう。ゴッホの父親が使っていた大きな聖書、＜イザヤ書＞一部分が開かれている。その横に置かれた黄色の小さな本。ゾラの生きる喜びという題目が見える。そして大きな聖書の右側に置かれたロウソクは消えている。父が歩んだ聖職

[13] 関吉浩「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ　我の魂の自叙伝」 學考齋　2008.73 参照

者の道、その道の痕跡が聖書の中に残っている。皆が行きたがる楽しい人生の道を、黄色いゾラの本が物語っている。神が導く崇高で永遠なる道、人間が追求する快楽の人生の道、この絵でゴッホはこのように考え、語りかけているようである。[14]“父は神の道を行く。その方に会いにここを離れた。私は人生の喜びを探しにこの場を離れます。”

現代哲学の巨匠、マルティン・ハイデガー(M.Heidegger)は人間の現存在(Dasein)は全て各々の現事実的な生き方をすると言ったことがある。そして、彼の代表的な著書である「存在と時間」では本来性と非本来性、日常性と決断性の狭間で心配しながら生きていく存在が正に人間であると言ったことがある。[15]ゴッホもやはり牧師の父の人生を見ながら一人このように考えたのではないだろうか。彼の内面の何が彼の父と同じ牧師の道ではなく画家の道に進ませたのだろうか。ゴッホはなぜ画家の道が神の定めた道であると決断したのだろうか。聖書の真理と単純で素朴な人生の中の霊性の力を説教ではなく絵で表現しこなす素質を与えられた神に答えたのだろうか。神の恩寵と精霊が満ち溢れるのを貧しい人々と共にしながら、単純で素朴な人生の中から芸術と霊性の香りを分け与え続けたゴッホはついに大きな悟りを得る。それは空と分かち合いである。そのような心の姿勢を形象化したのが正に＜椅子＞ではないだろうか。

３）＜パイプを置いたゴッホの椅子 ＞；空と分かち合いの霊性

＜アルル.1889,9　油彩　**画布**93×73,5
ロンドン,ナショナルギャラリー＞

黄色の素朴な椅子がこちらに向かってひっそりと置かれている。素朴だがしっかりした風采を失わずにいる。編みこんだシートの上にパイプとパイプ煙草が白い布に包まれている。その白色は全てを忘れたかのような超然さを見せている。オレンジ色と土色の四角い模様の床は椅子と同じく素朴な雰囲気を増してくれる。左の上に木で作った小さな鉢植えに玉ねぎが青々とした根を見せている。小さくても粘り強い生命力を見せ付けているかのようだ。嵐が過ぎた後にも生き残った生命のように高貴に見える。それは苦痛の中でも湧きあがる希望の芽であろう。その希望の芽は傷ついた我々の心の中にも湧き上がっている。床のオレンジ色はゴッホが生まれ育った自然の大地そのものを象徴する。そして青みを帯びた薄緑の壁は宇宙であり、空を象徴する。神が創造されたその大地と空の下、素朴で真面目に生きようとするゴッホの孤独な姿を現している。それでもゴッホは希望を失わず新しい人生に対する意

---

[14] 関吉浩「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ　我の魂の自叙伝」 78－79参照

[15] マルティン・ハイデガー.「存在と時間」 李基相　訳　カササギ　1998 参照

志を燃やそうとしている様でもある。新たな芽が出た鉢植えにヴィンセントとサインが入っているのを見ても分かる。[16]

人はその人が共に生きる人々と周囲にある物や道具等を通じてその人格や品性が表れるものだ。ゴッホが共にした貧しく純粋な人々、そして素朴な自分の部屋、そこに置いてある椅子、その椅子を作品の対象にしたのである。誰かに良く見せようという意図や自分を誇示しようという欲がない。ただ単純で素朴な自分の生活に満足し、その満ち足りた内面から滲み出る澄んだ芳しい心の力で周囲を見つめる。私が席(椅子)を準備してあげるべきもっと貧しく、大変な人はいないかという思いで。自分を空にし分かち合いの霊性は統一思想で言うところの心情の本質正確に一番近いのではないだろうか。情をかけて愛しながら喜びを得ようとする抑えきれない心の衝動、心情の力は真理と共に多くの人々とその(真理の)内容を分かち合おうとする人生へと向かわせるだろう。我々は穏やかで謙遜に、今現在の自分の場所(椅子)に囚われず、与えられたその道を自然に歩めばいいのである。その道中、空を見上げてみよ。自らの現事実的な人生を象った存在の星が光り輝いているだろう。

４）＜星月夜＞；神へ向けた悲しき霊魂

6月の夜空を太陽と月、星と雲が華麗に散りべられて振動している。太陽と月が互いに出会い一つになって黄色の燦爛たる光の群れを成している。空で形成された大きな雲の群れが大地で渦巻きになって上昇してきた雲と絡み合って一つになろうとしている。それは神の祝福を受けた魂と地上の善なる魂が一つになる劇的な瞬間である。彼らの融合を祝福し、11の星が丸い光の群れを作り夜空全体を輝かせている。天空を振動させる豪華絢爛な光の下サンレミ(Saint-Remy)村の夜は深まる。その振動にはまるで関心がないかのように、黄色い灯りが無心に窓から漏れている。

村の真ん中にある教会の塔が天を貫くかのようだ。教会に集った人々は神の啓示などには関心がないかのようだ。ただ天を貫くかのような欲望と偽善だけが詰まっている。村の左側には大きなサイプレス(Cypres)の木が一本その空の振動に狂ったように枝を伸ばし天に向かって伸びている。血を吐いて絶叫しているかのようだ。その黒い絶叫はほぼ空の先まで続いている。

＜サンレミ　1889,6　画布　油彩　73,7×92,1 ニューヨーク現代美術館＞

白い光の群れを成している大きな星が、絶叫するサイプレスの木に近づき明るく照らしている。その白い光はサイプレスの木の悲しい叫びに胸を痛めてこぼす星の涙なのかもしれない。6月の夜空で一つに成りえないものたちの和合が成された中で、ゴッホの絶叫だけがこだましている様だ。[17]

---

16 関吉浩「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ　我の魂の自叙伝」 2008.207－208　参照

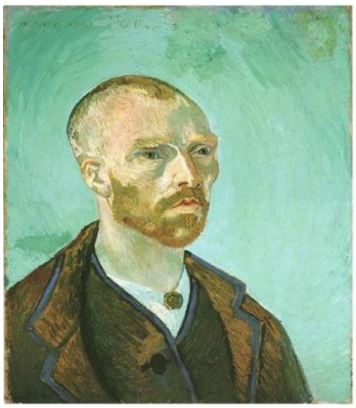
17 「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ　我の魂の自叙伝」 227　参照

ゴッホはサンレミ時代6月の夜空をなぜこのように描写したのだろうか。又なぜ、こんなにも絶叫したのだろうか。絶叫という行為はいつ、どのように出てくる行為なのだろうか。自分が望む通りにことが進まなかったり、巨大な力にぶつかって自分の意志が強制的に折られたり諦めなければならない時、人は自分の内面からふつふつと湧き上がる渦巻きを感じるようになる。そのような内面の渦と絶叫の瞬間が多かったからだろうか。ゴッホは取り分け自画像をたくさん描いた。自画像をたくさん描くということは自分のアイデンティティーと進み行く道について絶えず確認しようとする意志の現れである。貧しく辛い生活の中で、自分の肉体的苦痛(病魔)を絶えず意識する歳月の中で、ゴッホは絵を通じて自分自身を対自的に反省してきたのだろう。

４） 終わりに；ゴッホの＜自画像＞から読み取れる苦難の人生と霊性

今までゴッホの苦難の人生と絵に表れた自然と芸術への理解の多様な側面を調べ、彼の霊性と宗教性に対する考えの一端を一別してみた。我々が苦難の人生について考えてみるのは何のためだろうか。われわれはなぜ、自ら経験する苦労と苦難の意味について意識的に反省してみようとするのか。統一思想の創始者である文鮮明氏は我々が経験する苦難の意味について次のように言われたことがある。“苦労するのはその位置を確保するものだ。”[18] すなわち“苦生＝固生＝高生”である。(韓国語では同音意義語である。)

統一思想によれば人間を始めとした全ての万物は成長期間を通じて、言い換えれば時間的過程を通じて完成するようになっている。万物は生命の自立性によって成長するが、人間は自分の責任分担の完遂を通して完成するようになる。ところでここで言う責任分担の完遂とは自分の霊人体の完成、或いは人格の完成を意味するものであり、心情教育、規範教育又主観教育を通した全人的な成長と発展を意味するのである。よってこのような成長と発展を通して神のみ旨を察する心の器を育て、愛と奉仕を通して社会に寄与する人生を生きるのが神の創造目的を成す生なのである。ところがこのような神の創造目的を完成する事が実は容易いことではなく、我々個人においては苦労と苦難の過程を要求する事でもある。我々はこのような苦労を通して各自自分の人生の位置を確保するようになり、苦労の意味を昇華させる知恵を通して結局気高く美しい人生(高生)を花咲かすことができるのである。そしてそのような気高く美しい人生の痕跡はそのまま我々の顔に刻まれるようになる。ここで我々は顔の意味を今一度考えさせられる。ゴッホが自画像をたくさん描いたのもこのような顔の意味を繰り返し考えようとする意図からではないだろうか。



この日本の僧侶のように髪を短く刈ったゴッホの自画像を見ながら考えてみよう。深く

[18] 世界キリスト教統一心霊協会. み旨の道. 成和社

窪んだ目の中で鮮明に輝いて遠くを見つめる瞳は、すでにこの世の俗なるものを見つめるものではない。遠くで自分に慈悲をかけて下さる釈迦を憧憬する厳粛な仏者の瞳である。硬く閉じられた上唇に短く刈った鼻ひげと顎鬚がその厳粛さと真剣さを一層強くしている。服は僧侶の僧衣のような感じにするため、赤黒い栗色に服の先を紫で縁取った。首にかけているネックレスは自分が本物の仏者であることを表す証しである。背景はより聖なる仏者の姿を引き立たせるため顔を中心にして翡翠色で円形に塗っている。その上にゴーギャンに捧げると赤い色で書きヴィンセントのサインをした。[19]

絵を通してのみ対話できる人、ゴッホは一生貧しく辛い人生を生き、単純で素朴なものを愛し、そのような愛の中で自分の孤独と他人に対する愛を絵で昇華させながら生きたと言えよう。最後の作品として知られる＜カラスのいる麦畑＞を描いた後、ゴッホは自分の苦難多き人生と信仰生活、そして芸術の意味に対して次のように口ずさみながら死の道を選んだのではないだろうか。

“私の霊魂は悲しき魂でした。よって肉体も悲しく苦しかったのです。しかし、不幸な魂ではありませんでした。いつも神を思い、美を創造したがる、そのような魂でありました。その悲しき魂は苦痛の中で彷徨う肉体と、それでも一体を成して後悔せず気丈に生きようと努力したのであります。しかし、悪魔ののろいは遂に肉体を支配しそこにこれ以上魂が留まることを許せなくさせました。肉体の苦痛ともどかしい叫びにこの哀れな魂はこれ以上耐えることができません。悪魔が支配する病んだ肉体を打ち砕くしかないのです。でなければこの哀れな魂さえも悪魔のものになるかもしれないからです。”[20]

自分に与えられた神のみ旨を絵で表そうとしたゴッホ！そのような彼に感じられた芸術の意味を統一思想の芸術論－作家(画家)として彼が持っていた作品モチーフと主題、又対象意識と個性の問題等－の視点から反省することは、21世紀文化コンテンツ革命の時代に作品(コンテンツ)創作と鑑賞に対する新しい理解の地平を開くのに寄与する悩みとなるだろう。

---

[19] 関吉浩「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ　我の魂の自叙伝」 175　参照.

[20] 関吉浩「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ　我の魂の自叙伝」 283－284.